名古屋紀行

島村抱月自筆草稿

名古屋紀行

岡村抱月

（一）

今度学校の用事で名古屋へ行つた。帰りは伊勢に廻るといふので、幾らか観光の余暇もあらうと、出発の前夜、吉田東伍氏の地名辞書や田山花袋氏の新撰遊覧案内やら、それから近頃出た東海道写真名勝図とか子供、古い所で東海道名所図会など、手元にあり合はすもの〻拾ひ読みをした。熱田神宮の由来から、名古屋城の草創、金の鯱

は鋒の数が何枚あつて、加藤清正の献する所
ごとりな明な事まで記
憶して、そして清正が斯んな事をし
た當時の心理まで想像して見た。
一方にはまだ明日名古屋でやる筈の講演の
腹案がうまく纏まらないで居る。地方で土地
の有力者や実業家、官吏、教師、学生、商人など
りな雑多の人を集めて、さて文学の講話をする。
是れほどやりづらい仕事はたんとあるまい。一
今日の我が邦では、行の中には國際法の大家も

於雪北窓

と名

あれば、支那通の大家も、図書学の大家もある。
文学の諸家の演じてみられるのを聴くと、
如何にも心安さうで羨ましい。例へば外交と一言
言つて聴衆は其の言葉の背景、今日の我が
を理解して聴耳を立てる。處が我
の発する言葉は多数の聴衆には最初は
ただ空しい音に過ぎない。文学、文藝が
と言ふ前に、先づ文芸とは其の言葉の背景から説明
してかく説き出して居る。
折れて折り葉のしなりさえである。是れを思ふと、

の

2

東京がなつかしく、学校の講堂や寮の人々がなつかしくなる。

理解してもらふ相手、一言も説明を加へなくても理解して呉れる相手と一緒に居たい。自分等の相手と云ふ交際な世界からでもまた、やうな相手と云ふのは世の中といふものが何時までも断つてあるべき運命なのか、それとも能く成の人々が言ふ如く、文学者みたいなものを求めて居る雰囲気の中に籠居するせいなのか。狭い範ちうだちやあるまい。

名の

3

廿四日朝八時三十分発の急行列車が名古屋に着いたのは四時何分かであつた。熱田の森の見える頃から夕立ともザアーともつかぬ薄日の中に降り出した雨が斜に縞目を見せて一きり通り過ぎた。停車場に降り立つ時は何となく柔かいやうな雨だと思つた。やがて列車が止まつて一行は名古屋停車場に着く。プラットフォームに降り立つと、今までの

3

あはたゞし
倉皇

明るやうな車中の暑さに醗酵させられてゐる
一時人込の中に吸ひ込まれて、自分も
何がなしい気持で、一緒みなだれを打つて
改札口へと流れ出る。

女を見ると自分の一行はもう

重さうな大鞄を、赤帽も頼まず引ずるやうにして
持ち替へ持ち替へ行く若い婦人や、同車したドイツ
人夫婦の漫遊者らしいのが、瘠せた
をつれて、男は思ひ切り大股に、女は軽く小走り
に行き過ぎる。
引つ添うて
柵の所にかゝつてゐる。あはてゝ追つかけるやうに
して其の跡について、荷物運搬の世話は
一行のガイドたる田中氏に任し、始めの出迎の

校友諸氏が送いて呉れられ、改札口を出ると、旅館の番頭が待ち受けてゐて、用意の人力車で千秋楼へと送り込む。旅の面倒といふもの無い旅行だ。

此の度の用務といふのは早稲田大学の名古屋校友会及び巡回講話に出るためといふので、同朝の列車には自分の外に、市島氏、田中氏まで、国府津までは大隈伯も別荘行で同車せられ、有賀青柳の両氏は夕の列車で来る手筈であつた。

名古屋紀行　島村抱月

（二）

名古屋の人力車の幌が綾子張なのが目につく。是れは上方風なのだか何うだか知らないが、兎に角東京とは違つて居る。宿へつくと名古屋新聞の記者が見えて、何か目に留つたかと問はれたから、是れを真つ先に挙げて置いたが、東京の護謨引布のに比べて、暮しく柔かに見える。圓くしなやかに見える。綾子張の蝙蝠傘といふ形だが、継ぎ接ぎの垂の風にピラピラする所など、優しい上方式を発揮してゐる。

但し新しいのは善さそうだが、古くなると貧薄ぎたなく、だらしなく、よぼよぼして見える。是れも上方式どか何うどかは知らない。

停車場の前から一直線に大通りを上つて行くと、両側の建物が低く、狭いから殊に道幅が廣く見えて、真中の電車路、両側の街樹の列が、それを遠くして途の行當りに日清戦争の紀念碑が立つてゐる所、町の位取りが決る。西洋めいて、東京とりかよりもずつと進んでゐりこあそりにでもありさうな構である。さうかと思ふと両側の建物が、殊に停車場附近などは、舊式な燻れた家并で、強い盛んな色は一つもなく、灰色がかつた舊日本の面影を留めてゐるのであるから、何となく不調和に感ぜられた。戦捷紀念碑といふのが、ただ大きな砲弾か何かを基臺の上に立てた恰好なのは、藝術が無さ過ぎて、是れはまるでヨーロッパ式でも無い、プロゼイックな日本の一面を現はしたものだ。

6

車が……千秋楼と……

迎……

旅館は千秋楼と言つて、先年大隈伯が来名せら
榮町の　れた折に謹話した家ださうで、
玄関でもつてかに前島密氏揮毫の楼名の額
が掛けてある。
奥まつて東南明の二室を打ち通した部屋に
導かれて、何よりも先づ上着を脱ぎすてて、
窓や額ににじんだ煤まじりの油汗を拭うて、一
休みと思ふ所へ、もう出迎へられた……

8

八合目の湯を湛へた中へ

諸君や待受けられた校友が続々見えて、挨拶が
型の如く済む。湯が沸いてゐると、いふ
ので、御免を蒙つて湯屋へ忍んで行く。
……湯の檜の香の……失せない
の……ぢつと身を沈めると、痛快な新湯の刺戟
やがて五體の……
が……
へらせる。……一風呂浴びて泥に石鹸の泡
を思ふさま揉みつけ、……
……廊下へ……行くと……文楷別で

一巡

7

水道栓に口金を出せて

東は心ゆくばかり冷水に其の頭を打たせる
ときの楽しみは又格別である。(其の実水道栓
は水道でなくて井戸の水を汲み上げるのだと
いふ、[illegible]水の出が悪くさに。湯槽の中などと
も肩まで入れーば溢れるほどの湯が張つてあ
つて詐い。アバンダンスの味が無い) 是れで見れ
角も一日の[illegible]流連荒亡 [illegible]めたやうな陸
悪夢に襲はれたやうな道の[illegible]と
[illegible]重苦しさを洗ひ流
し、魔神の詰衣に[illegible]團扇の風を含ませた

是れだけの大都市に水道が無いとは驚いた

8

から寝に戻る。
氷の折にサイダー、平野水、[illegible]生菓子
座には麦湯などが出てゐてコップの水に蓋饅
頭を浮ししのを突つ々きながら居住を崩して
談笑するといふ有様、自分には殆ど凡て[illegible]
[illegible]であるが、一行の他の[illegible]諸民には永い
懇意の[illegible]と見えて如何にも親しさ
うで、傍で[illegible]聞いてゐる自分まで
善い心持になる。同室同勢[illegible]他の妻の方も[illegible]
を隔てて襖を隔てて[illegible]始めて[illegible]

8

其の羈絆力を現はして
来るので。嫉妬もあれ、排擠もあれ、競争もあれ、
式等のあらゆる社会事情と対立して、校友として
の一句が持ち来たす一種の雰囲気
情味は、斯んな場合に最もよく現はれる。地方
に出て校友と会ひ校友の世話に
なるといふ事の愉快な一面を自分は今度はじめ
て経験した。
座田中に名古屋新聞の社長せしよ紳士
あつて、盛に談笑する。「相変らず御盛でせう」

大野屋 10 20

5

名

「君へさう言はれると、何とも早や の志やらか面
くなつて」とカラカラと笑ふ。其の顔を忘
つと見てゐると、今までまるで記憶に無かつた面ざ
しがぼんやり心に浮んで来て、何うも見たやうな
人だと思ふ。名を聞いて始めて小山松寿君と
知れ者であつたと知れた。同年頃の寄宿
舎の仲間で法科の人、自分とは、征伐の千山
ピオンであつてのだ。それから色々と其の頃
の話が出て、十四五年前の若い夢を辿る。現に一行
のが十一たる田中氏は其の頃すでに寄宿舎

と市島氏が言へば、
御挨拶

さ

の会長であつた。小山氏は賄征伐の首領とあつて、其の人から厳責をも蒙り、箱詰係当の申渡を受けたことがある。自分はまた寄宿舎の足り無い為に其の人の役室へ何度通つて延期を嘆願したかも知れぬ。そして結局規則の表にかけられぬとあつて、表面一時退居たることにする。寄宿舎の下に在るその後、自分の部屋へは錠をかけて置いて、必要な道具だけ持つて目の届くまで近所の下宿に引移る。斯んな事が二度や三度はあつた。

其の頃の事を思ひ出すのである。

一名 名古屋紀行の

嶋和花月

雇三界に斯うした境遇で落合ふのだから面白い

（三）

着いた晩が商業会議所での校友会、酒井・田中・島田・田中洋服の晩餐、夜の十一時頃宿に戻つて、市島田中の二氏は明日の要務の準備に忙しく、自分は電燈の下に腹這になつて、名古屋の地図など取り寄せて見る。凡て地図を見ると云ふ事は、自分には最も興味ある事業の一つで、殊に此から遊覧しやうとする市街の図であれば

る場合には、興味は一層実際的になつて来る。案内者を待たないで、自分で地図によつて目ざす所を探し當てるのは愉快なものだ。ヨーロッパ旅行の際なども其の方針を取つて、根気よく地図と首つ引をするので、同行の小山温君を驚かした。名古屋も一つ同じ筆法で一見しやうと思ひはじめたのである。

所が見物案内の項目に挙げてあるもので、是れは見たいと思ふやうなものは一つも無い。分御縣廳とかて、紀念碑とかで観

やうによつて面白くなりさうとも無からうが、同じには見る気になれない。殊にこの暑さと、脚のやうに忙しい旅行では、そんなものは先で算中に入らない。第一に見たいと思ふのは大須観音の夜町が千日前式ごとかいふから覗いて見やう。次に例のお城が見えもある。それから此の辺は一帯に真宗の土地だから本願寺の別院といふのをついでに見やう。あとは町の光景、人情風俗といふやうなものだが、是れは一瞥ぐらゐでは分りさうもない。

料理と踊りとは明晩の河文の懇親會
で[illegible]れるどうか。
斯んな事で寝に着くのは十二時頃であつて、有
賀青柳の二氏は今夜一時頃に着く筈だから、隣
の麦酒を冷して、湯を沸かして、停車場へ迎に行
つて呉れ、忘れるなよと念を押す。大きな蚊帳の
中へは市島氏と田中氏が女中に中張、自
分は眠れないの恐れがあるから、小さい蚊帳に一人、
座敷を並べて寝て。が何うも眠れない。電気
もすつかり消して見たが、寝苦しい。さうする

と云ふ所へ出すのは此日の演説の腹案で。是れがま
で一向に纏つてゐない。日本在来の趣味が徳川
期に極まつて小化單化善化された経
歴と、西洋のギリシヤ趣味キリスト教趣味などとの對
比から、今後の趣味を何う導くべきかといふやうな
題で話すつもりにはなつてゐるが、一般聴衆に分かつ
て面白くて、纏まりがつくやうに行くか何うかが疑
はしい。あの例をあちこちへ鏤めて、[illegible]
理論は、あれ位に止めてなどと、工風[illegible]
して見るがうまく行かない。まあ是れだけの材

料で、其の場に臨んで何うともするさ、
取捨長短は
遺言は何時もその流儀ごと思つて諦める。其
のうち表座敷の方で人声がする。廊下を通
る女中の足音が忙しげに聞える。着いたのだなと
思ふ。田中氏もまだ眠らなかつたと見え
て、起きて世話をしに行つてやつた。幹事
の役も容易じやない。何處かの部屋で二
時の時計が鳴るのを聞いて、暫らくして眠
つたと見える。

（四）

七時頃に眼を覚ますと、半ば繰つた戸の隙から日が
さし込んで、暑苦しい。前後して皆起きた。顔
を洗ふ廊下で青柳氏や留氏に會ふ。お疲れで
せう、とりとめもない挨拶を交はして、朝日の
さない座敷に戻ると、庭の青葉が蔽す
朝涼の気が心地よい。全体に家の造り
が割の奥深い、細々とした、密やかな風で、庭な
ども狭い地坪の向ふは直ぐ九尺の板塀で、其の上
部一二尺許りが格子になつて居る。其の前へ松、楓

13

茶を啜つて

大概の樹木を軒に攻めつけて植え込み、を始め石を惜気もなく置いて一間々々の地面は苔を着て、湿気の香ひを絶てたりとりふ訳へである。

椽先へ座蒲團を持ち出して、團扇を使ひながら東京及び其の地の新聞を読む。不断は何の興味をも覚えない地方新聞が、其の地に来ると不思議に好奇心を刺戟する。却つて東京の新聞よりも先にそれを読む。論説から、市電の話から、東京のですら、さして興味のない記事

8 れ

今日の講演には暑中で

まで

が、皆意味を持つて其の地を説明して呉れるやうに思はれる。一行の事を書いて記事も無論読んで。そして其の書き振りの精粗確不確の上に其の新聞紙の性質価値をも揣摩して見る。

今朝はじめて名古屋の調膳に向つた。茄子の胡麻実の味噌汁、茶碗盛はまつい。鮎の塩焼に酢をかけて喰ひ、之れは自分には始めてだ。ちよつと変つて味、だ。〇〇の甘煮、梅干の巻いたのに砂糖をかけた椿に。生卵の要求が大分あつたが、自分は宅で

の

14

から精を養つて置く必要があるとかので、

手前の雛の卵を温め了れてから、買ひ卵の酸くさいのを呑み…吸ふ気になれなくなつたので止めて。其の代り書食には名物の鰻を食はせられた。青柳君は更に其生肝をまで呑つて元気をつけて居た。

八時半、市島・田中の二氏は基金募集方面の要務を弁ずるために外出、有賀氏は座塔のため宿に残り、青柳氏と自分とは此の半日の暇で名古屋を見物することにした。先づ電車で熱田へ行かうかとの議であつたが、時間の都合で止めて、兎も角城を一見しやうと思つた。城には例の地図主義で徒歩しやう、とも思つたが、何にせよ九十何度の大暑に焼けさうな地いきりが強く、人力車で行くことになつた。途中で写真機を肩にかけた。途中の店で久しぶりのフィルムの手札形十二枚巻を買ふと、一円七十五銭とられた。帰朝してからフィルムは一度も用ひなかつた為、相場は知らないが、馬鹿に高いと思つた。

名

伊

降りて見物した。

15

引返

金之車だ、うるさく説明して呉れる。石垣の組の
空濠から、三の丸、二の丸、お天守、大手門と廻
まつて一正面の、最も近い所まで来て車が止ま
る。遠見に見て楼に金の鯱、名古屋人士
の誇りとする城楼の棟は、稍近く見られたが、
併し位置が極めて悪い。城全体のかかりも見えなけ
れば、それかと言つて鯱だけが鮮かに見えるほど近く
もない。もう是れからは這入れない。城内を見
物するには位階何等とかに上でなくては、解つても駄目

例の通り無官のものは國民扱にされて仕方ないのだ。

つまらない

どしよ。いやした気持がして、引きか
へさうかと思つたが、今少し離れて、全体の形
でも見て置かうと、右手の練兵場へ
廻つた。跡戻りして
茲からは、ちやうど日を直うて城を見る形になる。
うんと踏ん張つて石垣の、幾重かの上に、例のク
ラシカルな、冷え切つて色や線が、威圧力其の
ものゝ権化のやうに積み重ねられてゐる。如何にも
静で如何にも重い。而白味は此の全体の輪廓に
存する。鯱の金の、日光に反射する
み満知する

1/

1-2 名古屋 …

鳴村花月

…な色が果して城…の印象…かれ
かは疑問だ。茲で青柳氏を画中に入れて写真を
取る。

（五）

東本願寺の前で車を…の間に
も流るに大きな構へだ。…
番に托して置いて、…しく…た…を
上り、本堂の中に這入って了ふと、寺に固有な一
種の重たい空気が…

頭を押へつける。

雨一葉

向ふの柱の根に、萎びかゝつて一人の婆さんが、尼のや
うに禿くた頭を垂れ、膝を二重にして一心に拝み入
つてゐる。間が廣いために豆ほどの大
きさにしか見えないが、舊い誠の信仰の量
これらが最後の一粒なのだらうと思ふと、おそろしい
光景だ。堂の右手の…の下にあるのは左甚五郎
の彫つて何とか云ふ猫が、仰ぎ見るさへ目がくら
くする此の天に、そんな…由緒が我等に…
何の刺戟を待へやうぞ。…瓦や土の巡りか…の…
烈しい門内を逃れるやうに出て車に乗び乗りし

17

もう何所へも寄るなと命じて、一直線に宿に歸つて。十一時過ぎ寝てしまふ。

名古屋見物はされだけであつたが、その外は見ていと思ふ所もなかつた。ただ夜の町景色だけはと思つたが、それも暇が無くて、翌朝はもう出發と其の夜はいふ事になつてしまつた。思へばそれだけは惜しかつた。

午後一時から縣會議事堂で講演會が開かれ、午後六時からは再び商業會議所で

招待といふのがあり、九時頃から付の地方新聞の招待文といふ料理店で懇親會が催された。斷り難いといふ人間はなかなかに思想の動物でなくなつてしまよ。

此の日午前に來訪せられた人々の中には名古屋新聞の記者、三年前早稲田の文科を出て居る中村孤月君の親友などがある。中村君は特に自分の講演を期待して聽者の種類などを擧げて、寧ろ忘れる人々を満足させる爲にもの親切な

18

18

注意を惹かれるが、講演會の一般的な性質上、
何うもそれが思ふやうに行かなかつた。
阿文の記事だけの文を綴らう。
入口はいさゝか、奥へ行くに從つて、庭や樹の生ひ茂
つた間を殆ど迷宮的に廣がつてゐるのが此の
有名な料理屋の構造である。恐らく晝でも
薄暗い小座敷が幾つもあつて、絃歌低唱の聲が
やうなさゝら中から聞えるといふ趣なので
あらう。
會は表の大廣間で開かれた。自分等一行を

正座に据ゑて、市の有［illegible］校友、
何れも粒選りの紳士諸君が六十餘人の大一
座である。座中には早く慶應義塾を出
て今は此の地の三井銀行［illegible］
［illegible］會話の中に巧に英語を挿む事の
好紳士［illegible］もあれば、早稲田を明治十八九
年頃に出て、現に市會議長の要職
を帯びる遠野［illegible］氏もゐる。其の他にも
やうな人が大分ゐる。斯ういふ人々と一座
するのに、自分［illegible］

系に要地を占めず

志

子名

の

28

19

新代の誇りをも感ずる
と共に、一色、年齢世故の影響であるとも
いふ甘さをも感ぜさせる。止みを得ないの二つ
の感じが混合して擽ぐつたいやうな気
持になる。
今夜は打つろげといふので、禮服を変な
着估谷衣みかへ、一風呂浴びて来る。
く頃から膳が出て、酒が一巡めぐり、花嫁人側
の挨拶、それに對して市島氏が、お礼に早稲田大学
第二期計画の要点を織り交ぜて述べられる辞

今は中々老練なものだ。それが終ると、も
うそろ／＼杯の交換がはじまる。座中に酒の雰囲気
が漲るにつれ、お客の野太いバス聲と藝妓の華
やかなソプラノ聲とが一緒になつて
潮のやうに湧き立つ。
大分上機嫌になつて来た一行中には、名古屋女
のタイプの議論型の通り
も始まつて、現物を前に据えて置いての論か
ら間違つたはないか、概して関東の張のあるの
と上方の人形式なのとの中間ごろうと、

20

よさと、但しそれにしては七分まで上方式なのが純
名古屋で、関東式の分子の加はるにつれ、近代化
し落しんは雑種化してのぞらうといふ説であつて、
そんな事かと謹聴して居ると、すると側で
別に新しい説とも思はんが、名古屋特有の
を何か一つ聴かして呉れと注文が出る。待つてお
ても蝶吉とかいふ芸妓、これがおのつから一座を
率めて居て、地踊は西川名松の一同
門下の名取、先達つて御園座へ上つ
て中の一人であるといふ、それが仕舞の紳士と

「桑名の殿様」々々々々といふ声がかかる。

踊りに安場をしてゐる。あれ一つだけ抜いてなら
やりますといふ事に話が纏まつて、蝶吉を
始め、四人の舞妓が細曲を連ねて、桑名の殿様
何うとやら、さくれで茶漬を召上るといふやうな
四曲つづきの手踊に大喝采を博して。室は五曲
一続で、弦も曲も振も大同小異であるが、其の中
の一つだけ因州因幡式の様がはしい所がある
に肴いてといふ。踊の所で見ると、さう単しい物
ぢやない。伊勢音頭、乃至善通の盆踊の面白な
無細工なものでもなく、それかと言つて繊細巧緻

41

21

な振事ら白なことしたものでなく、或程度まで日本特有の舞踊の味が残つてゐて、それで全体みは舞踊のずつとリファインされた（四人手を振つて踊る踊は）寧ろ西洋のバレーなどで見る活動的、統一的な所がはいつてゐるものである。単純だけれども、それだけ東西折衷の味があつて、一種中間的な手踊の好例と見られる。踊で友人にこの話をすると、友人は大に笑つて、君も案外の殿様なんだ。野暮な事を言ふのだと言つたけれ共、兎に角おもしろかつた。踊る方が先づ名手であ

つた所（せい）もあらうが、自分は今度の名古屋見物の興味の中心をこの踊りに置く。

料理は成程うまい。自分の鈍い舌にも、東京の強い味でなく、京都の淡（あわ）い味でなく、濃厚といふのも当るまいが、まづ

婉な味、舌に媚びつくやうなものだと思つた。

22

座の乱れた時、小山氏が歌澤を聞かせく。三味線弾きを連れて来て、自慢の征伐の選手と歌澤、二つの丘の間には余程の距離がある。其の距離を此の人は一足飛びに飛び越して了ふのだらうか、それとも一歩々々に埋めて行くのだらうか、すごすごと戻つて居る間に、序方では、筆の上遠野氏が、胸毛の辺まで真赤になつて、障子に寄りかゝつてまゝ、お國名物の秋田甚句を二三番、さびと聲に意味を交へて、星小には一同が唱

聞かせく。

大野屋 10 20

來る。先出君が久しぶりに若返つての歓待ぶりだと思つた。着物は先に送らせ、借浴衣のまゝ車に揺られ、酔つた肌を一杯に風に吹かせ宿に帰つたのが十二時頃であつた。明日はもう伊勢へ立たねばならぬ。忙がしいことだと思ひながら寝に就く。

絵團扇に鳴海絞の香かな　—（完）

17、元

23

大野屋 10 20

Z7873
¥50.00